

2022.9.4 主日礼拝

聖霊降臨節第14主日礼拝（家庭礼拝の式順）

黙 祷

聖 書 エステル記4章13-17節

説 教 「この時のために」 牧師 三浦 啓

讃美歌 515「きみのたまものと」

献 金

黙 祷

昔、ペルシアというとても大きな国がありました。ペルシア猫といわれる毛の長い猫がいますが、それは元々ペルシアのあたりにいた猫のようです。それから、イエス様が生まれたとき、黄金と乳香、没薬を持って占星術の学者たちが東の国からやって来たことが記されていますが、その東の国がペルシアだったと言われています。ペルシアの国は、イエス様が生まれるずっと前からありました。

そのずっと前の話、ペルシアはある意味で、聖書に出て来るユダヤ人の“恩人”でした。なぜなら、ユダヤ人はバビロニアという大きな国との戦争に負けて、国を滅ぼされ、捕まってバビロニアに連れて行かれました。バビロニアで無理やり50年も生活させられました。けれども、そのバビロニアをペルシアが滅ぼして、王様のキュロス王が、ユダヤ人に「自分の故郷に帰っていいよ」と自由にしてくれたからです。

喜んでエルサレムに帰り、神殿を新しく建て直した人々がいました。しかし、そのままペルシアに残るユダヤ人もいました。残ったユダヤ人の中に、美しい一人の少女がいました。それが、今日の話の主人公エステルです。

エステルは、子どもの頃、お父さんとお母さんを亡くしました。それで、いとこのモルデカイという人が、エステルを引き取って育てました。エステルはとても美しい娘に育ちました。

その頃、ペルシアの国はキュロス王から4代目のクセルクセス王の時代になっていました。クセルクセス王には、ワシュティというお妃がいました。けれども、ワシュティはわがままで、クセルクセス王の言うことを聞きません。それで、王様はワシュティをお妃の座から退けました。

王様にはワシュティに代わる新しい妃が必要になりました。そこで、ペルシアの国中から、かわいい、美しい女性がたくさん、お城に集められました。その中から新しいおきさきを選ぶためです。そして、たくさんの女性の中で新しいお妃に選ばれたのが、エステルでした。

話は変わりますが、王様の次に偉いのは、ハマンという大臣でした。ハマンは王様のお気に入りです。みんな、ハマンが通ると、ひざまずいて頭を下げました。ハマンが通るとき、お城の役人も国民も皆、ひざまずいてハマンに頭を下げるようにと王様が命令を出したからです。しかし、ハマンに頭を下げない人が一人いました。それは、エステルの育ての親のモルデカイです。

自分に頭を下げないモルデカイを見ると、ハマンは腹が立ちました。そして、モルデカイをいつかひどい目にあわせてやろうと思いました。ある日、ハマンはモルデカイがペルシア人ではなく、ユダヤ人であることを知りました。そこでハマンはモルデカイを処刑する陰謀を思いつきました。彼は、クセルクセス王のもとに行き、「王様、国内に王様の命令を聞かない民族がいます。ユダヤ人です。このまま放っておくと危険です。その民族をすべて処刑してしましましょう」と提案しました。何も知らない王様は、ハマンの提案を受け入れて、ユダヤ人処刑の命令を国中に出しました。

さあ、大変なことになりました。ユダヤ人は皆、この命令に泣き悲しみました。そのような中で、モルデカイはお城にいるエステルに伝言しました。「ユダヤ人を滅ぼす命令を取りやめにしてください、と王様に頼んでほしい」と。エステルは迷いました。と言うのは、王様から呼ばれていないのに、自分から王様のもとに行ってはいけないと決まっていたからです。決まりを破れば、死刑にされてしまうのです。

エステルが迷っていると、モルデカイはさらに伝言しました。「自分はおきさきだから、自分だけは助かるとは思ってはいけない。今、ユダヤ人を助けられるのは、あなたしかいないのだ。あなたがユダヤ人でありながら、ペルシアの王の妃になったのはどうしてだと思う？それは、今この時に、ユダヤ人を救うためだ。そのために、神様はあなたをお妃にしたのだ」。その言葉に、エステルもハッと、決心しました。そして、今から3日間、ユダヤ人は皆、食事を取らず、自分

のために祈ってほしいとモルデカイに伝えました。

3日後、エステルは王様のもとに行きました。王様はニコニコと喜んでエステルを迎え、彼女を死刑にすることはしませんでした。エステルは、自分はユダヤ人です、と告げ、ユダヤ人を滅ぼす命令を取りやめにしてくださいと頼みました。王様は、すぐに命令を取りやめ、この陰謀をたくらんだハマンは処刑されることになりました。ペルシアのユダヤ人は、こうして救われました。ユダヤ人は、この時のことを記念し、神様に感謝して、「プリムの祭り」というお祭りを祝うようになったということです。

14節に「この時のためにこそ、あなたは王妃の位にまで達したのではないか」という言葉があります。これはモルデカイがエステルに言った言葉です。今日はこの聖書の言葉を、ぜひ覚えてほしいと思います。この時のために、今この時、ユダヤ人を救うために、あなたはお妃になったのだ。

エステルと同じように、私たち一人ひとりにも、「この時のためにこそ」と感じる時があるものです。例えば、中学3年生や高校3年生はこの時期くらいから受験に向けて本格的に準備を始める時期です。苦しい勉強に耐えて、がんばって来たのは、この受験の時のためです。

でも、“何のためなのか”分からないこともあります。学校でいじめられる。会社をくびになる。友人との関係が壊れる。エステルのように、両親を亡くすこともあります。その時は、苦しく、つらいだけで“何のためか”分からなくなることもあるでしょう。

私は、学生の時、将来何になりたいのかわからないまま大学生活を送っていました。何をしたいのか、何をすべきか宙ぶらりんのまま過ごしていました。周りの同級生が社会人として働くのを見ながら、いつまでも学生をしている自分がダメ人間のようにも思えました。しかし、神様は私に、“牧師になりなさい”と声をかけてくださいました。

社会人になるまで、伝道師になるまでずいぶん遠回りをしましたが、遠回りをしなければ出会えなかった人たちやさまざまな経験があります。遠回りしなければ、甲東教会や敬和学園、桐生東部教会で働きのお機会を与えられることはなかったかもしれません。

「この時のためにこそ」、という時が私たちの人生にはあります。苦しみや悲しみの中にも、失敗したことにも、無駄だ、無意味だと思えることの中にも、神様はきっと、その先の将来に、「この時のためにこそ」、「この時のためだったのだ」と思える時を、私たち一人ひとりに用意していただきます。そのことを信じれば、元気が出てきます。勇気が湧いてきます。慰めと希望の思いが与えられます。何もないと思える今も、後で振り返った時にとっても意味のある時間であったと思えることはたくさんあります。私たちは新型コロナウイルスの感染状況により、日々の生活も仕事も学校生活も信仰生活も振り回されています。新型コロナウイルスに向き合う生活が2年半になりますが、感染が収まっては新しい変異株が登場し、それが世界中で流行します。終わりの見えない中を私たちは歩まされています。「一体この時に何の意味が？」と何度思わされたでしょう。しかし、この大変な時にも神様は私たちに意味のあるものを用意してくださっているはずです。だからこそ、この大変な時を投げやりにならず、感情に流されず、神様に心を向けて歩みたいと思います。神様が私たちに用意してくださっている1つ1つの時間を大切に、前を向いて歩いて歩んでいきましょう。

(牧師 三浦 啓)